

叙事詩の宗教哲学

— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (VI) —

茂木秀淳

〈Mokṣadharmā 和訳〉¹

[187章] (= D 194章, 7066-7128)

ユディシュティラは言った。

- (1) 人には大我²と呼ばれるものがこの世界で考えられている。大我とは何であり、何から生じたのか³。それを私に語れ、祖父よ⁴。

ビーシューマは言った。

- (2) プリターの子よ、「大我を」と汝は私に尋ねる。汝にそれを説明するであろう、愛しき者よ。それは最高の幸福をもたらす歓喜 (sukham) である。
- (3) それを知れば⁵、人はこの世で喜びと安楽を得るであろう。また (良き) 果報も得るであろう。それは一切の生き物の幸福である。
- (4) 地・風・虚空・水そして五番目として火、(これら) 大元素 (mahābhūtāni) はあらゆる生き物の生成と消滅である。
- (5) それ (= 大元素) から⁶創造されたものは、その同じもの (= 大元素) に繰り返し赴

1 本稿は『叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究(V)—』(『密教文化』第189号400-388ページ, 1995年3月)に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本稿より用いる略号は次の通りである。

Buitenen [1956]: Studies in Sāṃkhya(I), JAOS vol. 76, 1956, pp. 153-157.

Buitenen [1957]: Studies in Sāṃkhya(III), JAOS vol. 77, 1957, pp. 88-107.

Hopkins: E. W. Hopkins, The Great Epic of India, Its Character and Origin, 1901, Reprint 1978, Calcutta.

Johnston: E. H. Johnston, Early Sāṃkhya, 1937, London.

Edgerton: Franklin Edgerton, The Beginnings of Indian Philosophy, 1965, London.

2 adhyātma Deussen: mit dem Namen des innern Selbstes Edgerton: man's over-soul N. ātmānaṃ cittam adhiḥkṛtya pravṛtto yogadharmo 'dhyātman /

3 P. yataś caitat D. yathā caitat

4 D. はこの後にさらにユディシュティラの次の問を続ける。従って、以下 P. と D. の詩節番号は一つづつずれる。

kutaḥ sṛṣṭam idaṃ viśvaṃ brahman sthāvarajaṅgamam /
pralaye katham abhyeti tan we vaktum ihārhasi //

この世の一切の動く者と動かぬ者は何から創造されたのか、バラモンよ。

(この世が) 帰滅するとき、(それらは) どのように消滅するのか。それを私にここで語るべし。

5 D. にはこの前に次の句があり、全体として三行詩となっている。

sṛṣṭipralayasamyuktam ācāryaiḥ paridarśitam /

((大我は) 創造と帰滅に関連して師匠たちによって示された。)

6 P. tataḥ D. yataḥ

- くのである。生き物における⁷大元素は海にとっての波のごとくである⁸。(cf. MBh. XII. 239.3cd)
- (6) 亀が四肢を伸して再び引っ込めるように (cf. MBh. XII. 239.4ab), そのように生き物の本体は⁹は生き物 (bhūtāni) を創造して再び引っ込めるのである¹⁰。(cf. MBh. XII. 239.4)
- (7) 存在物の創造者はあらゆる存在物の中にある五種の大元素を創造し、そしてそれら(存在物)を多様にした。(?)そして後に個我 (jīva) は(多様さ?)を見るのである¹¹。(cf. MBh. XII. 239.6)
- (8) 音と聴覚と(耳の)穴 (khāni) は虚空(という大元素)から生じたのである。風(の大元素)から皮膚・触感・運動そして言葉という四つのものが生じたのである¹²。(cf. MBh. XII. 239.9)
- (9) そして色形と目と消化¹³の三種は火であると言われ、味覚と湿気と舌の三種は水の性質 (guṇa) であると伝えられている。
- (10) 香り、嗅覚そして身体のこれら¹⁴三種の性質である。(cf. MBh. XII. 239.11ab) 大元素は(以上の)五種のみであり、思考器官 (manas)¹⁵が六番目と¹⁶言われている。
- (11) 感官と思考器官とはこの(人の?)認識器官 (vijñānāni) である。理性 (buddhi) が七番目、さらに知田者 (kṣetrajña, 個我) が八番目と言われている。(cf. MBh. XII. 239.14)
- (12) 目は見るためのものであり¹⁷, 思考器官は疑いをなす。理性は決定のためにあり¹⁸, 知田者は証人のごとく存在する。(cf. MBh. XII. 239.15)
- (13) 彼(知田者)は両足の裏から上を、そして上方と下方を¹⁹見るのである。(cf. MBh. XII. 239.18ab) 知田者によってこの世界の内部はすべて満たされていると知るべし。

7 P. bhūteṣu D. bhūtebhyaḥ

8 この比喩においては、海が大元素に、波が生き物に対応していなければならない。他のヴァリアントの mahābhūteṣu bhūtāni の方がよく対応している。

9 bhūtātman Edgerton: self of (or appearing in) the (material) elements; it seems to mean the empirically observed living being, without disinction of body and soul. (p. 258, fn.1) Buitenen [1957]: "the embodied, elemental ātman," the material world (p.108, fn.49) Deussen: Bhūtātman (Element-Ātman) cf. Manusmṛti 12.12; Hopkins, p.15ff; Johnston, pp. 48-51; E. Frauwallner, Untersuchungen zum Mokṣadharmā. Die sāmkyistichen Texte, WZKM 32, 1925, p. 169.

10 P. sṛṣṭvā saṃharate D. sṛṣṭāni harate

11 P. 'nu paśyati D. na paśyati Edgerton は否定辞のある読みをとって "the self (jīva) does not see this" と解している。

12 P. vāyoḥ tvaksparsāceṣṭhāś ca vāg ity etac catuṣṭayam D. vāyoḥ sparsās tathā ceṣṭhā tvak tritayam smrtam

13 P. paktis D. pākas

14 P. te tu D. ete

15 N. mana iti kartā jīva ucyaite

16 P. ṣaṣṭhaṃ tu D. ṣaṣṭhaṃ ca

17 P. ālokanāyaiva D. ālocanāyaiva

18 P. adhyavasāyāya D. adhyavasānāya

19 P. arvāg ūrīhvaṃ ca D. arvāk cordhvaṃ ca

20 P. puruṣe cendriyāṇi D. puruṣair indriyāṇi

- (14) 人における感官は²⁰ここで残りなく知られねばならない。暗さ・活動的・静かさ (tamo rajaś ca sattvam) はそれ (感官) をより所とする状態 (bhāva) であると知るべし²¹。
- (15) 人は理性によって生き物のこの去来を知り、熟慮して徐々に最高の寂靜を得るのである。(cf. MBh. XII. 187.54, 240.9)
- (16) 理性はもろもろの性質 (guṇa) を²²制御する。また理性のみが思考器官を第六番目とする感官すべて²³を制御するのである。理性がなければ²⁴どうしてもろもろの性質が存在しようか。(cf. MBh. XII. 239.19)
- (17) 以上のように (iti), あらゆる動くものと動かぬものはそれ (buddhi) からなっている²⁵。(あらゆるものは、理性が滅すれば) 滅し、(理性が生じれば) 生じる。それ故、そのように²⁶教示されたのである。
- (18) それによって見るものが目と言われ、聞くものが耳と言われる。鼻は臭いを嗅ぎ、舌によって味を知ると言われている。
- (19) そして理性は皮膚によって可触物 (sparśa) に触れる²⁷。理性は種々に²⁸変異する (vikriyate)。(理性が) 何らかの対象に注意を向ける (saṃkalpayaty) 時、思考器官 (manas) として存在するのである²⁹。(cf. MBh. XII. 240.9ab)
- (20) 理性の住処でありそれぞれ異なる五種の対象を持つものが五種の感官³⁰であり、見えざるもの³¹がそれらに住む³²と言われている。(cf. MBh. XII. 249.6ab)
- (21) 理性はプルシャに支配され³³、三種の状態において存在する (triṣu bhāveṣu vartate)。(cf. MBh. XII. 240.6cd) (理性は) ある時は歡喜を得、またある時は悲しむのである。(cf. MBh. XII. 240.7ab)
- (22) またある時は、(理性は) 快樂を伴って存在することもなく、苦しみを伴って存在することも無い。(cf. MBh. XII. 240.7cd) このように、人々の心において³⁴において三種の状態として (理性は) 存在するものである。

21 P. viddhi bhāvāṃs tadāśrayān D. te 'pi bhāvās tadāśritāḥ

22 P. guṇān D. guṇair

23 P. sarvāṇi D. bhūtāni

24 P. buddhyabhāve D. tadabhāve

25 tanmayam N. tanmayaṃ buddhimayam

26 tathā N. tathā buddhimayatvena

27 P. sprśati ca sparśān D. sparśayate sparśaṃ

28 P. 'sakṛt D. sakṛt N. sakṛd iti yaugapadyam ucyate kartrādibhāvasya, ... jñātṛjñeyānāṃ sahaivotpattir ity arthaḥ /

29 P. yena saṃkalpayaty arthaṃ kiṃcid bhavati tan manaḥ D. yena prārthayate kiṃcit tadā bhavati tan manaḥ

30 P. pañcendriyāṇi D. indriyāṇi

31 adṛśyo N. adṛśyaś cid ātmā Deussen: der Unsichtbare [der Kshetraja] Edgerton: the Invisible (soul, spirit)

32 adhiṣṭhati Deussen: throned Edgerton: abides in (or, presides over)

33 P. puruṣādhiṣṭhitā buddhis D. puruṣe tiṣṭhatī buddhis

34 narāṇāṃ manasi Deussen: im Geiste der Menschen Edgerton: in the thought organ of men

35 P. nātivartate D. ativartate

- (23) 状態を本質とするこのもの（理性）は、これら三種の状態を越えるのである（?）³⁶。
 あたかも川の王である海は、波を伴って大きな境界を（越えるように）³⁶。(cf. MBh. XII. 240.8)
- (24) 状態を越えた (atibhāvagatā) 理性は、(変異した) 状態である心として (bhāve manasi) 存在する。なぜならば³⁷活動的となったラジャスがその (=心の) 状態として存在する (anuvartate) のであるから。(cf. MBh. XII. 240.10)
- (25) かの理性はその時³⁸あらゆる感官を活動させるのである³⁹。サットヴァは歡喜、ラジャスは悲嘆、そしてタマスは迷妄というのがその三種（の状態）である⁴⁰。
- (26) この世における状態は何であってもすべてこの三種の中に⁴¹（存在するのである）。(cf. MBh. XII. 240.14ab) 以上のように理性の道はすべて汝に説かれたのである、バーラタ族よ⁴²。
- (27) 知恵ある人はあらゆる感官を制御すべし。サットヴァ、ラジャス、タマスは生きている者 (prāṇin) が常に依存するものである。
- (28) 感覚 (vedanā) はサットヴァ的、ラジャス的、タマスのという三通りがあらゆる生き物において (sarvasattveṣu) 見られるのである、バーラタ族よ⁴³。
- (29) 快樂に触れるのはサットヴァの性質 (sattvaguṇa) であり、苦に触れるのはラジャ

36 Edgerton: as the sea, ..., with its waves (never gets beyond) its boundary. (p. 259) Buitenen [1956]: just as the billowy ocean, ..., goes beyond the waves of the current. (p. 156) cf. Hopkins: The constant unchanging epic simile is that one remains, not over-stepping, "as the sea does not overpass its shore". (p. 159)

37 P. hi D. tu

38 P. sadā D. tadā

39 P. pradarsayati D. pravartayasi P. の読みで脈絡がつかない。なお D. はこのあとに次の句を挿入している。従って以下、詩節番号が一行づつずれる。

tataḥ sattvaṃ tamobhāvaḥ prītiyogāt pravartate /

40 P. ca te trayāḥ D. tu te trayāḥ

41 P. eteṣu te triṣu D. etesu vai triṣu

42 Buitenen は187章第21詩節からこの詩節までに関し、モークシャダルマ240章に見られる類似の記述を考慮して、以下のようなテキストの再構成を提示している (Buitenen [1956], p.155)。

puruṣādhiṣṭhitā buddhis triṣu bhāveṣu vartate / (187.21ab; 240.6cd)

seyam bhāvātmikā bhāvāṃs trin etān ativartate //1 (187.23ab; 240.8ab)

saritāṃ sāgaro bhartā mahāvelām ivornimān / (187.23cd; 240cd)

atibhāvagatā buddhir bhāve manasi vartate //2 (187.24ab; 240.10ab)

yadā vikurute bhāvaṃ tadā bhavati sā manaḥ / (240.3ab)

pravartamānaṃ tu rajas tad bhāvam anuvartate / (187.24cd; 240.10cd)

indriyāṇi hi sarvāṇi pravartayati sā tadā //3 (187.25ab)

śṛṇvati bhavati śrotraṃ sprṣati sparśa ucyate / (240.cd; 187.18ab)

paśyati bhavati dr̥ṣṭi rasati rasanāṃ bhavet //4 (240.5ab; 187cd)

jighrati bhavati ghrāṇaṃ buddhir vikriyate pṛthak / (240.4cd; 187.19ab)

indriyāṇīti tāny āhus teṣv adṛśyādhitīṣṭhati //5 (240.6ab; 187.20cd)

adhiṣṭhānāni buddher hi pṛthagarthāni pañcadhā / (187.20ab; 240.9ab)

indriyāṇāṃ pṛthag bhāvād buddhir vikurute hy aṇu //6 (640.4ab)

ye caiva bhāvā vartante sarva eṣv eva te triṣu / (240.14ab; 187.26ab)

anvarthāḥ saṃpravartante rathanemim arā iva //7 (240.14cd)

iti buddhigatiḥ sarvā vyākhyātā tava bhārata // (187.26cd)

43 D. はこの詩節の cd 句と次の詩節とをあわせて三行詩としている。

スの性質である。タマスの性質と結びついた時、(快樂と苦の) 両者は活動しないのである (? avyavahārikau)⁴⁴。

- (30) 歡喜に結びついたものが身体あるいは心 (manas) にあるような時、その時⁴⁵、サットヴァ的な状態である (vartate sātṭviko bhāva) と見なさるべし⁴⁶。(cf. MBh. XII. 212. 29, Manusmṛti 12.27)
- (31) また、自己にとって苦と結びついたもの、満足しないこと⁴⁷については、それを氣にかけることなく、ラジャスが活動していると考えるべし。(cf. MBh. XII. 212.30, Manusmṛti 12.28)
- (32) また、迷いと結びついたもの、ぼんやりと存在するもの (?)⁴⁸、究明できず、認識できないようなものがあれば、それはタマスと考えるべきである。(cf. MBh. XII. 212. 31, Manusmṛti 12.29)
- (33) 享樂・満足・歡喜・快樂・心静かな状態が、とにかくも生じるが、これらはサットヴァの性質である。(cf. MBh. XII. 212.26, 239.23)
- (34) 不満・怒り・悲嘆・貪欲・そして不寛容というこれらは、原因の分かる時もあるし分からない時もあるが、ラジャスの特徴である。(cf. MBh. XII. 212.27, 239.24)
- (35) そして自惚れ⁴⁹・迷妄・興奮・睡眠と怠惰 (svapnatandritā) がどのようにしてか生じるが、これらはタマスの多様な性質である。(cf. MBh. XII. 212.28, 239.25)
- (36) 心は遠くまで行き、多くのものに達し (bahudhāgāmi), そして願望と疑問を本質としてもつが、そのような心をよく制御した人は現世も死後も安樂をもつ者である。
- (37) この二つの微細なる物質要素 (sattva) と知田者の相違⁵⁰を、一方は諸性質を創造するが他方は諸性質を創造しない、と知るべし。(cf. MBh. XII. 240.19cd, 20ab)
- (38) そしてまた、ブヨといちじくの木が常に結びついて存在しているように、互いに異なるこの両者は⁵¹結びついて存在しているのである。(cf. MBh. XII. 240.21cd, 22cd)
- (39) 本性としては (prakṛtyā) 異なる存在である両者は、常に結びついて存在している。あたかも魚と水が結びついているように、両者は (結びついているのである)。(cf. MBh. XII. 240.20cd, 21ab)
- (40) もろもろの性質は (guṇāḥ) アートマンを知らない。アートマンはあらゆる点から諸性質を知っている。そして⁵²アートマンは諸性質の観察者であるが、常に⁵³ (諸性質の)

44 avyavahārikau N. tamoguṇe prādurbhūte sati saṃyuktāu sukhaduḥkhasparśāu na bhavataḥ kiṃ tu moha evety arthaḥ

45 P. tabā D. tathā

46 P. avekṣeta D. ācakṣita

47 P. atuṣṭikaram D. aprītikaram

48 P. avyaktam iva yad bhavet D. avyaktaviśayaṃ bhavet

49 P. abhimānas D. avamānas

50 Hopkins: the difference between intellect and spirit, kṣetrajña (p.160)

51 P. anyonyam anyau ca yathā D. anyonyam etau syāt tāp ca

52 P. ca D. tu

53 P. sadā D. tathā

創造者であると⁵⁴思っているのである。

- (41) 最高我 (paramātman) は⁵⁵, 理性を七番目とし (自らは) 動かず認識することのない感官によって, 照明のために, (自分を?) 光のようにした。
- (42) なぜならば物質要素 (sattva) はもろもろの性質を (guṇān) 創造し, 知田者はもろもろの性質を見る。物質要素と知田者のこの関係は不変である。
- (43) 物質要素にも知田者にもいかなる拠り所もない。(知田者は) 物質要素とも思考器官 (manas) とも, そしてもろもろの性質とも混じることはない (?)⁵⁶。
- (44) それらの (=諸性質の) 手綱を思考器官 (manas) によって絶えず制御する時, その人のアートマンは物質要素 (sattva) の中に輝き出る。あたかも水瓶 (=sattva) の中で光 (=ātman) が輝くように。
- (45) 生まれついで (prākṛtam) 行為を捨て常に自ら喜ぶ聖者は, 自己が万物の本質と一体となるであろう⁵⁷。彼は最高の⁵⁸道を行くであろう。(cf. MBh. XII. 240.17)
- (46) 水鳥は, 汚れつつも⁵⁹汚れないように, 英知を完成した人はそのように生き物 (bhūta) の中で振る舞うのである (parivartate)。(cf. MBh. XII. 240.16)
- (47) 人はこのような本性を自らの認識によって (svabuddhyā) 放棄すべきである。嫉妬なき人は, 悲しむことも喜ぶこともなく振る舞うべし⁶⁰。(cf. MBh. XII. 240.13)
- (48) 本性の完成によって完了するもろもろの性質を (guṇān) を⁶¹それは (? sa) 絶えず創造する。創造者は⁶²蜘蛛の如く, 性質は糸の如く考えられるべし。
- (49) (死によって) 滅した者は消滅しない。(なぜなら滅した者の) 消滅は直接知覚によっては知覚されないからである。その目に見えないことは (parokṣaṃ tad) 推理によって到達されるのである。
- (50) ある人々はこのように断定し⁶³, また他の人々は消滅したと断定する。この両者を考え, よき判断に従って決断すべし⁶⁴。
- (51) このように分裂した認識からなる (buddhibhedamayam) 心の束縛を確固として解放し, 安楽に座るべし。疑問を断ち切ったならば嘆くべきではない。
- (52) 汚れた人は (知識によって) 清浄さを⁶⁵獲得するであろう。それはあたかも, 満水の

54 P. saṃsṛṣṭā D. saṃsṛṣṭān

55 P. paramātmā D. padam ātmā

56 P. saṃsṛjati D. saṃsṛjate N. saṃsṛjate nirdiśati prakāśayatity arthaḥ Buitenen [1957]: The fourth *pāda* is obviously corrupt; we expect; “*sattva* creates the *manas* and the further evolutes,” as in 37; (p.107, fn.40)

57 P. sarvabhūtātmanabhūtaḥ syāt D. sarvabhūtātmanabhūtas tasmāt cf. Johnston, p. 49.

58 P. paramām D. uttamām

59 P. lipyamāno D. salilena

60 P. cared D. samo

61 P. svabhāvasiddhyā saṃsiddhān D. savabhāvayuktyā yuktas tu

62 P. sraṣṭā D. sūtraṃ

63 P. vyavasyati D. 'avyavasyanti

64 P. adhyavasyed D. vyavasyet

65 P. śuddhiṃ D. siddhiṃ

川に（やって来た時、）人々の中で知識ある者が（川に）飛び込んで（清浄となる）ようなものである。この知識を (jñānam idam) そのようなものと (tathā) 認識すべし。
(cf. MBh. XII. 241.7)

- (53) 対岸を知る者は大河を⁶⁶渡りつつも苦しむことはない⁶⁷。それと同様に大我 (adhyātma) を独存と⁶⁸そして最高の知識と知るものは(苦しむことはない)。(cf. MBh. XII. 241.8)
- (54) このあらゆる生き物の (bhūtānām) の去来を認識し、吟味して、それから次第にこの認識によって (buddhyā) 最高の安息を⁶⁹得るのである。(cf. MBh. XII. 241.9)
- (55) 三つの目的 (trivarga) を知り⁷⁰、前方に光をもち⁷¹、心 (manas) によって探求し、調御され、真理を見、嘆くことなき者は解脱した者である⁷²。
- (56) アートマンは、本性の完成していない者によってあちこちに注意が向けられる⁷³、(akṛtātma) 制御しがたい⁷⁴ 感官において⁷⁵部分的に (vibhāgaśaḥ) 見ることはできない。
- (57) このように認識したならば、悟った者である。悟った者であることの証しは他にあるうか。こう認識して、賢者たちは為すべきことは為したと考えるのである。(cf. MBh. XII. 241.11)
- (58) 知恵なき人には非常に大きな恐れとなるようなものからの恐れは賢者には存在しない。なぜならば、誰にもそれよりすぐれた境地 (gati) はないのであるから。人々は（何らかの）性質が残っている時に (sati hi guṇe), (その境地に) 匹敵しないと語るのである⁷⁶。(cf. MBh. XII. 241.12)

66 P. mahānadīṃ D. mahānadyā

67 P. na taran yathā D. na tad anyathā このあと D. は cd 句として次の句を挿入し第54詩節を構成している。その後 P. の53cd 句に相当する部分が1行詩として扱われている。

mahānadyā hi pārajñas tapyate na tadanyathā /
na tu tapyati tattvajñāḥ phale jñāte taraty uta //

(対岸を知る者は大河によって恐れをもつ。それ以外にはない。

しかし真理を知る者は恐れることなく、結果が知られているので渡るのである。)

68 P. kaivalyaṃ D. kevalaṃ

69 Z. śaṃ paraṃ tataḥ D. śam anantataḥ

70 viditaḥ N. viditaḥ kṣayiṣṭputvena jñātaḥ

71 P. prāgyotiḥ D. prekṣya yaś 「前方の光によって照らされ」か。 Edgerton: illuminated by light before him

72 P. sa vimucyate D. ca vimuñcati

73 P. viśṛṣṭeṣu D. viśṛṣṭaiś ca

74 P. durjayeṣu D. durvāyaiś ca

75 P. indriyeṣu D. indriyaiś ca

76 Deussen: Einen höhern Weg gibt es für keinen, nach erreichter Tüchtigkeit prisen sie seine Uuvergleichlichkeit. N. guṇeḥ (guṇe?) ādheye apaneye vā sati guṇānām ādhānāparakarṣa-tāratamyād atulyatām pravadanti na tu nirguṇe ity arthaḥ (下線部分は本文)

77 P. yat D. yaḥ

78 P. kumvataḥ D. sarvataḥ

79 tad ubhayam N. tadubhayam prācinam aihikaṃ ca

- (59) 目的なく行なわれた行為, そして前世で為された行為を⁷⁷捨て去る人にとっては, この世界で行為をしつつも⁷⁸それが (? tad) その二つの⁷⁹厭うべき事 (apriyam) を引き起こす事はない。ましてやどうして束縛となるものを (引き起こすことがあるか) (? kutaḥ priyaṃ)⁸⁰。(cf. MBh. XII. 241.14)
- (60) その二つの境地を⁸¹常に知る人たちは, この世間において泣きながらあれこれ (tat tad eva⁸³) 幾度となく嘆く病気の人々⁸⁴を見るべし。またそこにおいて健康な嘆くことなき人々を見るべし⁸⁵。(cf. MBh. XII. 241.13)

[188章] (=D195章, 7129-7150)

ビーシュマは言った。

- (1) さて, プリターの子よ, 汝に四種の禪定のヨーガ (dhyānayoga) を話そう。それを知って, すぐれた聖仙たちは永遠の完成に至るのである⁸⁶。
- (2) ヨーガ行者たちは, よく完成するような仕方では禪定を行う。彼らは知識に満足し, 涅槃に到った心を持つ偉大な聖仙である。
- (3) 輪廻 (世界) の罪から解放された者たちは, プリターの子よ, 再び (この世界に) 帰ってくることはない。彼らは, (次の) 誕生の罪を滅し, 本来の姿に (svabhāve) 落ち着くのである (paryavasthitāḥ)。
- (4) 彼ら是对立するものを持たず, 常に本性に住し⁸⁷, 解放され, 執着なき状態⁸⁸・論争なき状態・そして心 (manas) の寂靜を作るものに常に依拠しているのである⁸⁹。
- (5) そこで聖者は, 感官の群れを包み込み, 木片のごとく座って, ヴェーダ学習と結びついた⁹⁰心 (manas) を一点に保持すべし。
- (6) 彼は耳によって音を聞くべきでなく, 皮膚によって触感を知るべきではない。目によって形を知るべきでなく, 舌によって味を知るべきでない。
- (7) ヨーガを知る者は禪定によってあらゆる臭いを捨てるべし。力ある者はこの五種からなる集団をかき乱すものを望むべきではない。

80 D. はこの詩節の後に次の句を1行詩として挿入している。

lokam āturam asūyate janas tasya taj janayatiha sarvataḥ /

(病んだ世界に満足しない人にこの世で完全にそれが (それを?) もたらすのである)

81 ubhayaṃ padam N. ubhayaṃ kramamuktiṃ sadyomuktiṃ ca

82 P. sadā D. satām

83 N. naṣṭaṃ naṣṭaṃ putradārādikaṃ

84 P. āturajanān virāviṇas D. āturajanān nirāviṣaṃs

85 この章の最後の3詩節 (jagatī, triṣṭubh) は前の詩節からのつながりが見られず, 意味も明瞭ではない。

86 P. gacchanti paramarṣayaḥ D. gacchantiha maharṣayaḥ

87 nityasattvasthā N. nityaṃ sattve prakāśe sthitāḥ Deussen: beständig in der Realität beharrend Edgerton: eternally abiding in goodness

88 P. asaṅgīny D. asaṅgāny

89 P. nityam āśritāḥ D. niyamasthitāḥ

90 P. svādhyāyasaṃśliṣṭam D. dhyānena saṃśliṣṭam N. adhyāyasaṃśliṣṭam iti prācinapāṭhe prāṇavena ghaṇṭānādavad atidirghoccaritenaikibhūtam

91 P. saṃsajya D. saṃgrhya

- (8) それから賢者は、五種からなる集団を心に固定し⁹¹、五種の感官と共に動き回る心を集中すべし。
- (9) 確固とした者は、あちこち動き回り、休む場所なき、五つの門をもつ落ち着かない心を、最初の禪定の道において⁹²、内部に⁹³に集中すべし。
- (10) 彼が感官と心とを丸めた (piṇḍikaroti) 時、それが禪定の道の最初の段階であると、(かつて) 私によって述べられた。
- (11) 彼の最初に制御され⁹⁴心 (manas) を六番目とするもの(=感官) は⁹⁵、すぐ後に惑乱して⁹⁶跳ね回るであろう。雲の中の稲妻のように。
- (12) 木の葉の上にある水滴が震えながらあらゆる方向に動き回るように、それと同じようにこの人のその心は (tac cittam) は⁹⁷禪定の道に存在しているのである。
- (13) 瞬間的には集中した心 (manas) は何とか禪定の道にある。しかし再び、風の道をさまよい、風のようになるのである。
- (14) 落胆することなく⁹⁸、悩みを去り (gatakleśo), 怠惰を脱し⁹⁹、利己心なき¹⁰⁰禪定の ヨーガを知る者は、再び禪定によって心を (cetas) 集中すべし。
- (15) 初めて第一の禪定に集中する聖者には、疑念・不安・熟慮が¹⁰¹生じる。
- (16) 聖者は、心によって苦しみつつも、(心)を集中させるべし。聖者は落胆しては (anirvedaḥ) ならない。自らの (ātmano) 至福を得るべし。
- (17) 例えば、埃や灰や糞の堆積した塊は、急に水によって濡らされても (水が) しみわたることはない¹⁰²。
- (18) また例えば、乾いた粉はいくらか油がついても湿ることはない (abhāvitam)。しかしそれは少しづつ徐々にすべてにわたって湿ることになる¹⁰³。
- (19) 同様に、感官の群れを次第にしみわたらせ (samprabhāvet), 徐々に (対象から) 引込めるべし。(そうすれば) 彼は正しく寂靜に至るであろう。
- (20) (彼は) 最初の禪定の道に到達し¹⁰⁴、絶えざる ヨーガによって心と五種からなる集団とは自ら (svayam) 静まるのである、バーラタ族よ。

92 P. pūrve dhyānapathe D. pūrvaṃ dhyānapathe

93 P. 'ntaram D. 'ntarā

94 P. tat pūrvasampruddhaṃ D. tat pūrvaṃ sampruddham

95 P. manaḥṣaṣṭham anantaram / D. ātmanaḥ ṣaṣṭhamāntaram /

96 P. samudbhrāntam D. samudbhrāntā

97 P. tac cittaṃ D. cittaṃ ca

98 anirvedo N. anirvedo yoge nirvedaśūnyaḥ syāt /

99 P. gatatandrīr D. gatatandrīr

100 P. amatsaraḥ D. amatsarī

101 P. vicāraś ca vitarkaś ca vivekaś ca D. vicāraś ca vivekaś ca vitarkaś ca

102 P. na yānti paribhāvanām D. na yānti paribhāvanam N. paribhāvaṇaṃ mūrtyādyākāreṇa kalpanaṃ na yānti na prāpnuvanti Deussen (paribhāvanam): nicht sogleich zusammenbacken Edgerton (paribhāvanām): not immediately become saturated (cf. Monier. Sanskrit-English Dictionary, pari-bhū, to soak, saturate)

103 paribhāvanam Deussen: dieses alles allmählich eine feste Masse bildet Edgerton: little by little it gradually becomes saturated

104 P. dhyānapathaṃ prāpya D. dhyānapathe sthāpya

- (21) その快樂は人間の（世俗的）努力やいかなる偶然によっても得られない。それはそのように自己を制御した者のものである。
- (22) ヨーガ行者たちは、この快樂を獲得し、禪定の実践に (dhyānakarmaṇi) 歡喜し、かくしてかの病なき涅槃に至るのである。

[189章] (=D196章, 7151-7173)

ユディシュティラは言った。

- (1) 汝によって四種のアーシュラムに関する事、そして王のダルマが語られた。また種々の主題をもつさまざまな多くの物語が（語られた）。
- (2) 汝からダルマに関連した話も聞いた、大きな知恵を持つ者よ。しかし私にはいくつか疑問がある。汝はそれを私に語るべし
- (3) 低誦の (jāpaka) 果報の獲得について私は聞きたい、バーラタ族よ。低誦する者の果報は何とされているのか。あるいは低誦する祭官達は（死後？）どこにいるのか。
- (4) 低誦の規定を完全に私に語るべし、汚れなき者よ。「低誦」とは、サーンキヤとヨーガの行為規範なのか。
- (5) それは祭式の規定なのか。どのように低誦すべきとされているのか。その一切を私に語れ。汝は私にとってすべてを知る者 (sarvajña) と考えられるから。

ビーシュマは言った。

- (6) ここでもまたこの古い話を人々は語る。かつてヤマとカーラ（時）とあるバラモンとが行った話を¹⁰⁵。
- (7) ヴェーダーンタにおいては、低誦に対し、（行為の）棄却が見られる¹⁰⁶。寂靜（なる行為の棄却？）はヴェーダについての議論から生じる。ブラフマンに住するこの二つの（低誦と棄却の）道は（ある部分は相互に）依存するが、（ある部分は）依存しないのである（？）(saṃśritau na ca saṃśritau)。
- (8) 王よ、ここで、伝承に従って原因が話されるであろう。ここでもまた¹⁰⁷心の集中とそして感官に対する勝利が伝えられている。
- (9) 真実・火の世話。寂しい場所の訪問¹⁰⁸・禪定・苦行・自制・忍耐・悪意なきこと・節

105 ヤマとカーラとバラモンとの対話は192章において語られる。

106 第7詩節はP.とD.は次のように大きく異なっている。P.は全体として一つの三行詩であるが、D.は三行詩と二行詩の2つの詩節となっている。両者の相違する個所に下線を付す。

P. saṃnyāsa eva vedānte vartate japanam prati /
vedavādābhinirvṛttā śāntir brahmaṇy avasthitau /
mārgau tāv apy ubhāv etau saṃśritau na ca saṃśritau //

D. sāṃkhyayogau tu yāv uktav muninbhir mokṣadarśibhiḥ /
saṃnyāsa eva vedānte vartate japanam prati /
vedavadāś ca nirvṛttāḥ śāntā brahmaṇy avasthāḥ //7
sāṃkhyayogau tu yāv uktau munibhiḥ samadarśibhiḥ /
mārgau tāv apy ubhāv etau saṃśritau na ca saṃśrutau //8

Vedānta の語については、Hopkins, p.93 参照。

107 atrāpi N. atrāpi mārgadvaye 'pi

108 viviktānām sevānam N. vivikānām sūddhānām āhārādinām ekāntadesānām vā

食 (mitāśanam) ・

- (10) 対象からの後退・節度ある言葉・平静。以上が活動からなるダルマ¹⁰⁹である。次に（行為の）停止からなるダルマについて聞くべし。
- (11) 梵行者が低誦している時に（他の）行為は停止されるが如くに、このすべてを言われたとおり残りなく避けるべし。明かな、あるいはあいまいな、あるいは抛り所なき（? vyaktāvvyaktam anāśritam）三種の道に¹¹⁰近づいて¹¹¹。
- (12) （棄却を実践する人は）積み上げられたクシャ草に座り、クシャ草を手に持ち、クシャ草による髪の房をもち、襤褸を¹¹²まとい、その中にまたクシャ草によって覆われているのである。
- (13) もろもろの対象に対して敬礼すべし。しかしもろもろの対象に耽溺してはならない（na ca bhāvayet）。心（manas）の平衡を保って、心にのみ心を置くべし。
- (14) 彼は、吉祥なるヴェーダを誦しつつ（japan），その知恵によって¹¹³ブラフマンを冥想する。あるいはまた彼は三昧（samādhi）に専心してそれ（＝ヴェーダ）を捨て去るのである。
- (15) ここで彼は、ヴェーダの力に依存して、禅定を生じるのである。彼は清浄となった自己をもち、苦行によって調御し、嫌悪と欲望を滅するのである。
- (16) 貪欲と迷妄なく対立する者なき者は、嘆くこともなく執着もしない。「為すべきでないことの行為者でもなく¹¹⁴、為すべきことの（行為者でも）ない」というように確固としている。
- (17) 自惚れ（ahaṅkāra）と結びついては心（manas）をどこにも向かわせることはできない。アトマンの把握にも¹¹⁵専心せず、自尊心もなく、行為なき者にもならないのである。
- (18) 禅定の実践を専らとし、専心し（yukto），禅定を保持し、禅定を確信する者は、禅定の中に三昧（samādhi）を生じさせ、次第にそれ（三昧）も捨てるのである。
- (19) 彼はその状態において一切を捨て去り、快樂に住して（sukhi），願望なく¹¹⁶氣息を捨てるのである。そしてブラフマンの身体と結びつくのである¹¹⁷。
- (20) あるいはまたその時、（ヨーガの）道にある者が、ブラフマンの身体に留まるのを望まない（時には）、上昇してどこにも生まれることはない。
- (21) 自我の認識を¹¹⁸確立して、寂静となった病なき者は、埃を離れた清浄にして不死のア

109 P. dharmo D. yajño

110 P. trividhaṃ mārgam D. nivṛttaṃ mārgam

111 P. は三行詩，D. は二行詩と一行詩となっている。

112 ciraṅḡ D. kuśaiḡ

113 taddhiyā N. sāmyadhiyā

114 P. na kartā karaṇiyānāṃ D. na kartā kāraṇānāṃ ca

115 P. cātmagrahaṇe D. cārthagrahaṇe

116 P. nirhas D. niricchās

117 P. samśrayate D. saṃviśate

118 P. ātmabuddhiṃ D. ātmabuddhyā

ートマンを獲得するのである。

[190章] (=D.197章, 7174-7186)

ユディシュティラは言った。

(1) ここで低誦する者におけるもろもろの道の (gatinām) 最高の到達¹¹⁹について語られた。これは低誦する者にとってただ一つの道なのか。あるいは他の道にも行くのか。

ビーシュマは言った。

(1) 王よ、低誦する者たちの道を注意深く聞くべし、威光ある者よ。彼らはある仕方 (yathā) 多くの地獄に¹²⁰至るのである、人中の雄牛よ。

(3) 前に述べたことをそのとおりに¹²¹実行しなかった低誦する者や祭式を不完全に行った者は地獄に至るのである。

(4) 自惚れ (abhimāna) をもって行為を行ない、それに対して喜ばず悲しみもしない¹²²、このような低誦者は地獄に赴くのである。この点について疑いはない。

(5) 自惚れ (ahaṃkāra) によって行われたことはすべて地獄へ連れていくものである。他人を侮辱する人は将来地獄に至るのである。

(6) (結果に対する) 願望をもって¹²³低誦を行う心迷える人は、願望の対象である地獄に至るのである¹²⁴。

(7) あるいは、自在力を得ようと活動する低誦者は¹²⁵そこに執着する。その執着こそが彼の地獄であって¹²⁶彼はそこから逃れられない。

(8) (あるものに) 執着するために低誦する者はそこに迷う。その人の執着が向かうところに生まれるのである。

(9) 間違った認識をもち知恵の熟さぬ者は、心が動揺している状態にある。(その者は) 動揺する道に至るか、あるいは地獄に至るのである¹²⁷。

(10) 知恵の熟さぬ愚か者が低誦すると迷妄に至る。彼は迷妄から地獄におもむく。そこに至った後嘆くのである。

(11) 「私は確固たるものを把握して実践する」というように低誦を¹²⁸する低誦者でも、十分でない者あるいは集中しない者は¹²⁹地獄に至るのである。

119 P. uttamā prāptiḥ D. uttamaprāptiḥ

120 P. nirayam anekaṃ D. nirakān anekān

121 P. yathoktam etat pūrvaṃ D. yathokutapurvaṃ pūrvaṃ

122 P. avajñānena kurute na tuṣyati na śocati / D. avamānena kurute na priyati na hr̥ṣyati /

123 abhisam̐dhyāpūrvakaṃ N. abhisam̐dhyā phalasaṃdhiḥ

124 P. yatrābhidyāṃ sa kurute taṃ vai nirayam ṛcchati D. yatrāsyā rāgaḥ patati tatra tatropapadyate / (=P., D. 8cd)

125 P. athaiśvaryaprvṛttaḥ saṃjāpakas D. athaiśvapravṛtṣu jāpakas

126 sa eva nirayas tasya N. sa eva tatra rāga eva

127 P. vādhigacchati D. vā niyacchati

128 P. japyam̐ D. jāpyam̐

129 P. na vā yukto D. na saṃyukto

ユディシュティラは言った。

- (12) 最高の者は原因をもたず¹³⁰顕現することなくブラフマンに住する。(しかし) 低誦する者はよき存在であるのに¹³¹なぜまた身体に入るのか。

ビーシュマは言った。

- (13) 誤った認識によって多くの地獄があると述べられた。低誦そのもの (jāpakatvam) は称賛に値する (praśastam)。これら (の地獄) はその中にある (tadātmikāḥ) 欠点である。

[191章] (= D 198章, 7187-7197)

ユディシュティラは言った。

- (1) どのような低誦者が地獄に行くのか、私に語るべし。私には関心が生じた¹³²。汝はそれを語るべし。

ビーシュマは言った。

- (2) 汝はダルマの部分として生まれたのである¹³³。汝は本性として正しき (dharmiṣṭha) 人である。ダルマの根本に依存する言葉を注意して聞くべし、罪なき者よ。
- (3) すぐれた本質をもつ (paramātmanām) 神々にとって、多くの住処や色をもち多くの形と果報をもつ場所、
- (4) 思いのままに歩き回れる天の宮殿とホール、蓮の花がありきれいな水の流れる¹³⁴種々の庭園は、王よ、
- (5) 四柱の世界守護神、シュクラ、ブリハस्पティ、風神、ヴィシュヴァデーヴァ、サーディヤ、アシュヴィン双神、
- (6) ルドラ、アーディトヤ、ヴァス、そして他の神々というすぐれた本質を持つ者にとっては、これらの場所は地獄なのである。
- (7) (これらの場所は、) 恐れなく、原因なく¹³⁵、苦痛の恐れに覆われることもなく¹³⁶、二者から¹³⁷解放され、三者から¹³⁸解放され、八者から¹³⁹そして三者¹⁴⁰からも (解放され)、

130 P. animittam D. anivṛttam N. anivṛttam svābhāvikaṃ anāgantukatvāt / animittam iti pāthe 'pi sa evārthaḥ /

131 P. sabbhūto D. tadbhūto

132 P. jātam D. rājan

133 P. darmasyāṃśaḥ prasūto D. darmasyāṃśaprasūto

134 P. cāmalodakāḥ D. caiva kāncanāḥ

135 animittam N. svabhāvasiddham

136 P. na ca kleśabhayāveṛtam D. na tatkleśasamāvṛtam

137 dvābhyām N. dvābhyām priyāpriyābhyām uktam /

138 tribhir N. tribhir guṇaiḥ priyāpriyahetubhir muktam

139 aṣṭābhis N. aṣṭābhiḥ puribhiḥ 'bhūtenriyamanobuddhir vāsanākarmavāyavaḥ / avidyā cety amuṃ vargam āhuḥ puryaṣṭakaṃ budhāḥ' ity uktābhir muktam

140 tribhir N. tribhir jñeyajñāñātṛbhāvair muktam

- (8) 四種の特徴を離れ¹⁴¹、四種の原因を離れ¹⁴²、興奮もなく¹⁴³、歡喜もなく悲しみもなく、疲労もないのである。
- (9) そこでは時は (kālaḥ cf. MBh. XII. 189.6, 192.1ff.) 燃え尽きる (?)¹⁴⁴。そこでは時は支配者ではない。王よ、時の支配者、そしてまた天界の支配者は自在神 (īśvara) である。
- (10) アートマンの独存性に到達した者はそこに赴いて嘆き悲しむことはない。最高の場所とはこのようなものであり、そして地獄もまたそのようなものである。
- (11) 以上のように地獄がすべてありのままに語られた。かの最高の場所から見れば¹⁴⁵、すべては地獄と名づけられるのである。

(1995年4月28日 受理)

141 caturlakṣaṇavarjaṃ N. caturlakṣaṇavarjitaṃ lakṣyate jñāyate viśayasvarūpam ebhis tāni lakṣaṇāni dṛṣṭīśrutimativijñātayaḥ

142 caturkāraṇavarjaṃ N. caturkāraṇavarjitaṃ uktair eva dṛṣṭyādiviśayatvakāraṇairūpādimmattvādibhir varjitaṃ

143 aprahaṣam N. aprahaṣam iṣṭaviśayalābhajaṃ sukhaṃ

144 P. sampacyate D. sampadyate

145 tasya sthānavarasya N. sthānavarasya sthānavarāpekṣayā